

# 日本声楽発声学会

学会通信 38号 2017年(平成29年)10月発行

## 会員の皆さま

各地のあちこちに豪雨の被害を残しながらも秋のさわやかな季節となりました。会員の皆さまにおかれましては、ご無事でお健やかにご活躍でございましょうか、お見舞い申し上げます。

学会通信第38号をお届けいたします。

今夏、本学会主催の”夏季研修会”が8月21日、22日に、恒例の日本福音ルーテル東京教会をお借りして、多くの参加会員を迎えて、講師の先生方の内容度高いご講演や、今年から実施しましたD講座、会員による「歌の集い」の演奏会等、無事充実のうちに終了致しました。それらの講座内容は、ここでは担当しました理事の方々の感想文として次頁に掲載しております。詳細は、2018年3月発行の学会誌に掲載予定です。

その夏季研修会から4日後、8月26日(日)に、秋田県の大曲(おおまがり)というところで催された花火大会がテレビで放映されたのを観ることが出来ました。テレビでもその規模の大きさは計り知ることが出来るほどの立派さで、画面いっぱいから次へと夜空に花を咲かせていました。当地は前日まで豪雨に見舞われ、用意された見物席は水浸しの状態でありましたとか、大勢の方のこの日のために祈願にも似た熱意と尽力で開催可能となり「大勢の観客の歓声で賑わっています」と、アナウンスの声も感動的に夜空に響いておりました。

花火大会は夏の風物詩として各地方で必ず催されておりますが、この花火大会は、全国の花火師が集まって来て、日頃の磨き抜いた技術で華飾の表現を競うコンクールでもありました。申すまでもなく花火師になるまでの技術習得の年月と忍耐力のあったことを思う時、私たちの音楽家のそれとオーヴァーラップして、光の一つ一つが瞬く間に夜空に消えて行く光の余韻が、愛おしくさえ感じられました。コメンテーターとして花火の事前談話をしておられたさだまさしさんが「私の芸術は12分が勝負ですが、花火師の芸術は5秒の勝負」と仰っておられました言葉が印象に残ります。

一つ一つの音に思いを込め、意味を込めて作曲された曲を、演奏家は、また磨

き抜いた声でもって一声一声に思いを込めて音声、音高、言葉、リズム、等々を明瞭に捌き、更に豊かな表現へと仕上げるための技術の向上に勤しむその年月の訓練は、精神力と忍耐を抜きにしては成功へと導くことは出来ないことは藝術すべてに相通ずるところでありましょう。日頃の訓練の蓄積の量が、そのまま成功への結果に繋がることは、花火、音楽、スポーツ等々皆同じであることを実感させていただいた大曲の花火大会でありました。寸刻を惜しむが如くの努力の日々を、花火に託して思いを馳せて感動できるのも、声楽技術にこだわって過ぎた来し方65年の人生の賜物でしょうか。本学会がますます鋭意進歩する研究団体となりますことをお祈り申します。

2017年10月 会長 永井和子

## 1. 2017年夏季研修会報告

1-1. A講座 8月21日(月) 13:00~15:00

ニコラ・ロッシ・ジョルッダーノ氏による公開レッスン

川上勝功

今年の夏は台風に遭遇することこそありませんでしたが、真夏の暑さの中、全国各地から多くの皆さまが新大久保のルーテル教会に参会され、4つのイベントは大いに盛り上がりました。

初日の午後一番のプログラムは、イタリアの超一級のテノール、Nicora.Rossi.Giordano氏による公開レッスンからスタートしました。

Giordano氏は、現在日本人の奥様と日本に定住されておられる方ですが、氏のプロフィールについては欧米での輝かしい活動実績が記されております。

この日のレッスンは、最初はベテランのソプラノの方、そして次に若いソプラノ、最後に、やはり若いテノールの方が参加されました。

実は、私はGiordano氏と以前より奥様やピアニストを通じて親交がありましたので、日本人の私たちにとって解っているようで中々確信の持てない、AppoggioやGirareそしてAqutoについて、特に教えていただきたい旨をお願いしてありました。

2時間の枠の中に一人40分ずつ3名という、かなりタイトな流れのレッスンであったため、皆さんにどれ程伝わり理解していただけたかは疑問ですが、私の感触では、ある意味大きなカルチャーショックがあったのではないかと思いました。

かつて、50年以上も前、当時私は藝大の学生でしたが、初めてイタリアオペラが来日し、上野の文化会館で公演を行いました。その当時のイタリアオペラ界を代表する、Del-MonacoやTebaldi、Simionato、Protti等の大歌手や名歌手が来日し多くの名演を残してくれました。我々学生はもちろんのこと、おそらく我々にとっての先生であった教授方にとっても、その声のあまりの違いに大きなカルチャーショックがあったと思いました。その後ドイツオペラも来日し、

Fischer-Dieskau 等の生の声を聴く機会も得ました。それだからこそ「声楽指導法研究会」が藝大の先生方を中心に発足したわけです。それは後に「日本声楽発声学会」となり、現在に至っているわけです。唯、当学会では、時の流れを受けて、ドイツ人、アメリカ人、ロシア人等の演奏やお話を伺う機会はあったものの、生粋のイタリア人声楽家の指導に触れたことはありませんでした。

私の勝手な想像ですが、当日 Giordano 氏に最初に一曲だけ演奏していただいた“Corengrato”に、さぞかし感動を覚えられたものと思います。前述しましたように彼はそのキャリアから言いましても超一級のイタリアのテノールだからに外ならないと思いました。

彼にはこれからも日本の声楽界のために、そして我々の「日本声楽発声学会」のためにも力をお貸しいただけるようお願いして参りました。

Giordano 氏にとりましては、初対面の方々にどう指導をすれば良いのか、戸惑いも多少なりともあったと思われそうですが、少なくとも我々にとりましては、本物のイタリア人の声楽家から今迄に経験したことのないイタリアベルカントの発声指導法に、生で触れることが出来たように思いました。

Giordano 氏には、次回発行の学会誌に直接彼の言葉で、我々日本人が抱えている諸々の問題点についてアドバイスを寄せて下さるようお願いいたしました。どうぞご期待下さい！！

## 1-2. B 講座 8月21日(月) 15:20~17:20

講座名： 現代日本の作曲家シリーズ 講座IV

講師： 香月修氏(作曲家・元桐朋学園大学音楽学部教授)

### 永井和子

桐朋学園大学の作曲科をご卒業後、作曲一筋に創作と教育に勤しんでこられました香月修先生をお招きして、作曲家のお立場からその奥義をお聞きすることが出来ました。先生の多くの作品の中で特筆すべきは、3年半かけて作曲された力作、オペラ《夜叉ヶ池》が新国立劇場で2013年に上演されたことでありましょう。この講座では、日頃先生の作品を多く歌われ先生の作品をよく理解しておられる歌手の松島理紗さん(Sop)に賛助出演を願い、西原瑠一さんのピアノ(お2人とも桐朋学園大学大学院在席中)による演奏で歌曲を2曲と、《夜叉ヶ池》のオペリアリアを2曲聴かせていただきました。またCDにより他の歌曲作品もお聴きすることができました。

これよりは、先生の講義内容を、要点に絞り紹介します。

「私は、大学生時代からどちらかというと器楽方面の曲を主に書いていきました。が卒業後、シューマンを聴いて目覚めました。シューマンの曲の特徴はピアノにあることから、私の作品の基本はシューマンにあるということを前提にお聴き願

います」との前置きから講座は始まりました。先ず1曲目、20代に作曲された三好達治詩の《鶯のうへ》、続いて、40代～50代ころの作品、三木露風詩の《月夜の森》（これは二期会の日本歌曲研究会からの委嘱作品）そして、最後に2013年新国立劇場で5日間に渡り上演されたオペラ「夜叉ヶ池」を紹介されました。

「先ず、先入観なしに演奏をお聴きください。」ということで演奏が始まりました。1曲目の《鶯のうへ》をお聴きした後に、作品として仕上げていく過程を説明。作曲を始める時には、詩の構成から曲全体の構成へとイメージを大きく固め、次には言葉のイントネーションの解説、情景描写をピアノパートで表現をしっかりと音にする等、詳細に作り上げていかれた過程を示されました。その上で、再度改めて演奏を聴かせて頂きますと、何と作曲家の創造豊かな意味あるイメージが具体的にメロディーや和音の中で描写されていることに驚嘆しました。桜の花びらが散るうらかな春の日の季節情景、和服姿の女性2人が石畳の上をカラコロと下駄の音を響かせながら語りながら行く詩の情景を、「分散和音、リズムによる譜割りの使い方、拍子を変えて心情の変化を作る等の工夫により一層の情景や心の移り変わり、変化を詳細に音楽で作ることが出来ます」と作曲技法の奥義を説明。また、詩を読んでいくといろいろな情景が浮かび、それに沿って作曲を進めていくと言葉も非常にきれいな流れを作ることができます、と淡々と語られる先生を通して頭の中のイメージが音符になる作曲家の凄さを感じました。その他、三好達治詩の「少年」、三木露風詩の「ふるさとの」（歌一鮫島有美子）をCDで紹介、また、相当の時間をかけて作り上げられたらしい「雲雀」（歌一山本富美、元本学会理事）などもCDで紹介されました。歌曲演奏の最後は、三木露風詩の《月夜の森》。バッハの形式、動機を取り入れ、シューマンの「月の夜」（Mondnacht Liederkreis op.39）の形態に倣って思い切り音程の幅を広げ、三木露風の宗教感からみた月夜の森をイメージして作られた曲は、美しくロマンティックな曲でした。

次にオペラの紹介です。随分前から台本を見つけ、年月をかけて構想を練り上げ、あたためたオペラ！やっとうらやまの目はみたのは、先生の60才を超えてからのことでありましたとか。

「大学卒業後、書きたいと思いつつチャンスに恵まれませんでした。その間にこの泉鏡花独特の幻想的文学の戯曲「夜叉ヶ池」が見つかり、ずっと暖め続けて60才にしてオファーがあったときは大変うれしかった。物語は、越前の山奥にある夜叉ヶ池にまつわる伝説、主人公の鐘楼番萩原晃とその妻百合の悲劇物語。雨乞の生け贄に選ばれた百合は自害、晃は絶望して鐘の掟を破る。クライマックスは、雷鳴が鳴り、村は水の中に飲み込まれるという物語。ドラマ性があり、戯曲だからセリフはいっぱいあり、登場人物も新しく加えたり、場面の入れ替え等々、演出の岩田達宗氏との共同作品として台本作りが始まりました。日本のオペラには〈ゆうづる〉が定番としてありますが、これを超えてしまうと現代ものになっ

てしまう。西洋のロマン派等のオペラのように、アリア、2重唱などそれを取り出して演奏会で歌える、スタイルは古いがそんなオペラが作りたい。また台本も自分の感覚を伝えたいために自分で作ることにこだわりました。

先ずヴォーカルスコアに2年間の期間がかかりました。自分との闘いで孤独な2年間でした。次にオーケストレーションへ、と楽譜を仕上げていきます。仕上がった時は、台本から音になるまでに3年半の年月を要しました。書きあがった時は何ものにも変え難い感動であります。

そして新国立劇場で実現を迎えます。新国立劇場のスタッフ、指揮者、楽団員は勿論のこと、楽譜の整理と指示を与える方々に至るまでのソルフェージュ能力のレベルの高さに驚きました。始めて実音になる時は、作曲家にとって最高の感動の極みであります。演技指導、舞台装置、衣装、ゲネラルプロローヴェ、とどんどんオペラは完成に向かって仕上がっていきます。作曲家である私は傍でただただ見ているだけでした。

5日間の公演が終わり、結果5,000人の集客がありました。その後は批評、うれしい批評から厳しい批評まであり、多くの批評を頂けるのはそれだけ反応があったということでありうれしく有難いことでもあります。」ここで、百合の子守歌とアリアが演奏され、以後、世の中に役立つ創作に専念したいと締めくくられ、講座は終わりました。

声楽家が一つの曲に新しく取り組むとき、作曲家の並々ならぬ作業があることにはあまり心を馳せることなく、自らの技術の苦心にのめり込んであれこれ試行錯誤しがちですが、仕上がっていく作曲家の意図を汲めば、また違った演奏法が見つかるかも知れない等、反省させられました。ひと音符ずつ書かれたどんな小さな音符にも作曲家の生命が込められ、そこに在ることの認識を戴いた講座でありました。

### 1-3. C講座 8月22日(火) 10:00~12:00

工藤和俊(くどう かずとし)氏

タイトル「感覚し、運動する身体：生体情報から読み解く身体感覚」

豊田 喜代美

講師：工藤 和俊(くどう かずとし)プロフィール

略歴：1998年東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系修了。  
1998年東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系助手。  
2002-2003年米国コネチカット大学知覚と行為の生態学研究センター客員研究員。  
2011年東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系准教授。  
2016年東京大学大学院情報学環・学際情報学府准教授。現在に至る。

はじめに

声楽発声に限らず、人の行為はその人の身体の運動によって成ります。本講演企画の説明にあたり、私事で恐縮ですが、お伝えさせていただきます。豊田は1999年入学の北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科での身体知研究により2008年博士号を取得しました（博士論文『クラシック声楽歌唱向上における知識創造モデル—スキルサイエンスからの接近』）。その際、マイケル・ポランニーの提唱した暗黙知（文章や図などで明示化不能な知）と形式知（文章や図などで明示化可能な知）の概念は声楽歌唱トレーニングに効果的であり、そのメカニズムを説明することができるという認識に至りました。暗黙知と形式知は相互補完作用によって働きます。明示化可能な形式知は正に身体運動科学によって得られるとの確信により、本講座を企画させていただきました。工藤和俊先生はスポーツのトップアスリートから厚い信頼を得ている身体運動科学者です。そのご研究には、声楽においても、100人100通りの身体がそれぞれに適切に機能するよう努める方法が示されており、各人の歌唱技術向上に効果のある可能性があります。

工藤和俊先生は、一つ一つの項目の実験状態とその結果（データ）を、画像・映像を駆使して大変に解りやすくご説明下さいました。受講者の方々のリアクションも活発で、時折り笑いが湧き起こるなど、皆さん、楽しく積極的に身体運動科学に接していらっしゃる事が窺えました。講演終了後に質問の手が多数ありましたが、制約時間内に全てに対応が出来れば良かったと思います。会員の方から、実際に計測等を体験するワークショップの希望も複数寄せられるなど、身体運動科学への関心の高さが示されていました。

講座の内容は次のとおりです。詳細は、工藤和俊先生ご自身により学会誌に記載されます。

講演タイトル：感覚し、運動する身体：生体情報から読み解く身体感覚

最初に、相撲・音楽演奏（ピアノ、ドラム）・スキージャンプ・スキー大回転・踊り・野球の画像が投影され、「音楽は芸術の体現であり、単なる身体運動ではない。一方で身体運動なしに音楽が成立しないことも事実である。工藤和俊」が、本講座企画の必然性として提示され、「“語りうる”領域としての実験/実証のフィールド、‘語りえぬ’領域としての芸術のフィールド 工藤和俊」が身体運動科学的アプローチとして示されました。

音楽演奏とスポーツの共通点として「身体運動なしには成立しない、やりなおしがきかない、長期にわたる練習が必要である、心理的ストレスへの対処が必要。工藤和俊」などがあげられ、現代において、スポーツ界で必要不可欠となっている身体運動科学研究が音楽に対しても有意義である可能性が説明されました。「身体／運動」の成り立ちについて、三木成夫氏の著書「生命形態学序説—根原形象とメタモルフォーゼ」が紹介されました。原腸動物から脊椎動物、脊椎動物の基

本設計・体幹、そして聴覚の進化について図を用いて説明され、引き続いて、工藤進氏の著作『記号化される身体の復権に向けて』から、“現代は記号の時代にあつて「言葉」はかつてなく「声」から遠ざかりつつあること（工藤進）”を話されました。続いて「声は身体を語る」の見出しで、発声について蛙とワニを対象に説明され、特にワニの発声が人間と同じメカニズムであることを証明した実験が克明な記録映像と共に結果のデータが示されました。次に、身体運動の成り立ちが、ベルンシュタインによる動作構築モデルで説明されました。それは、レベルA（内容：トーンのレベル、具体例：体幹の緊張とバランス）、レベルB（内容：筋-関節のリンク [シナジーのレベル]、具体例：リズムカルな移動運動）、レベルC（内容：空間場のレベル、具体例：到達運動）、レベルD（行為のレベル、具体例：目的を持った一連の動作）で構築されたモデルで、工藤先生は、「歌う」というレベルDの行為は、レベルA、レベルB、レベルCが基盤となって成立する、ということをお話になりました。その際、スキージャンプのオリンピック金メダリストでワールドチャンピオンのシモン・アマン選手を事例に、上記の構築モデル内容と具体例を説明なさいました。また、「巧みさ」のキーワードとして、姿勢(posture)、協調(coordination)、脱力(relaxation)をあげられました。姿勢については、横綱白鵬関の実験データを用いて説明なさいました。その姿勢の自由度について、「進化に伴う自由度の増大」を、進化する生き物の骨格とヒトの運動発達で説明なさい、「協調」については、ホテルの集団発光やストリートダンス他の事例を用いて説明なさいました。「脱力」の事例としては、横綱白鵬関が「攻めを吸収する」ことを実証したデータ、世界最速ドラマーの打叩時の筋活動、スキー滑降時の筋活動、ホルン演奏時の表情筋活動、ピアノ演奏会時の筋活動の各データにより説明されました。そして、講座のまとめとして、次のように結論付けられました。『歌うことを可能にしているのは、生物進化の産物であり、膨大な自由度を有する身体である。複雑な行為は、より基本的な背景活動によって支えられている。背景活動の鍵概念として、「姿勢」「強調」「脱力」がある。工藤和俊』。

以上、工藤和俊先生の講座内容を報告いたします。

#### 1-4. 2017年度 日本声楽発声学会 夏季研修会「歌の集い」演奏会 報告

日本福音ルーテル東京教会聖堂 8月22日13時開演15時終了

豊田 喜代美（演奏委員長）記

はじめに

今年度「歌の集い」は、夏季研修会の中に設定することを演奏委員会※で提案し理事会で正式決定されてから、第一回目の演奏会になります。「歌の集い」の趣旨は創設時と変わらず、その内容が協議の上変更されております。その一つに「レクチャー・演奏」の枠が設けられました。これは、夏季研修会の中の「歌の集い」演奏会であることを鑑み、設置されたものです。この枠の出演者は講師としての

ご出演となります。初回は山田実先生（テノール）がご担当くださいました。また、大学・修士等での卒業試験曲他に更に磨きをかける場として、若い世代の枠が1枠設けられています。今回は増田勇人氏（カウンターテノール/24才）の出演となりました（註：当初予定の喜屋武いつみ氏は体調不良で不出演のため変更）。そして今回の「歌の集い」演奏会では、演奏を聴いた余韻の中、極短く演奏者のコメントを頂きました。以上が今回からの新しい点となります。これまで同様に「歌の集い」演奏会は、日ごろの研鑽の成果を分かち合う場であり、演奏者自身の気づきによる歌唱技術向上を期待するものです。また一切の指導・批評を行わない趣旨ですので、次に感想として記させていただきます。今回初回となります「歌の集い」演奏会の「レクチャー・演奏」で山田実先生は、シューベルト作曲の「鱒」他を参考曲として原語と邦訳で演奏なさり、その功罪と日本語訳の問題点を具体的に解り易くご説明になりました。テノールのブリリアントで張りのある透明な歌声は会場に響き渡り、私的には柴田睦陸先生が懐かしく思い出されました。レクチャー・演奏は、山田実先生ならではの、爆発的に生き活きとした音楽の贈り物のようで、聴取者の皆様も真剣な中にも喜んでおられると感じました。そして歌唱技術向上は常に継続されるということを私なりに実感させて頂き、幸いです。また、日ごろの研鑽の成果をご披露くださいました、ご出演の皆様には、その素晴らしい演奏に、涙が溢れ、憧れ…、愛に包まれ、胸が躍り、崇高な光…、を感じさせて頂きました。感謝しております。演奏者の方々の次回のご出演を、聴取者の皆様方も期待されたのではないのでしょうか。「歌の集い」演奏会を、会員の皆様お一人おひとりに「日ごろの研鑽の成果を分かち合う自分のための場」として活用して頂けますことをお願いしたいと思います。

今回新規となる「歌の集い」演奏会のプログラム及び対訳は、各演奏者から資料をご提出頂き、永原理事・事務局の安原氏・豊田で作成作業を行いました。その方法につきましては検討して参りたいと思います。明確な入場者数は現時点で把握しておりませんが、補助イスが出される状況となりましたことも併せて記させていただきます。

以上、2017年度「歌の集い」演奏会の報告とさせていただきます。尚、本演奏会詳細は学会誌に掲載予定です。次に、8月22日「歌の集い」演奏会当日の出演者及び演奏曲を報告いたします。

※演奏委員会：泉恵得、齊藤祐、豊田喜代美

【出演者及び演奏曲】

- |                                    |                         |
|------------------------------------|-------------------------|
| □ 川上 勝功 Masanori KAWAKAMI バリトン     | 早川 揺理 Yuri HAYAKAWA ピアノ |
| ・An die Musik(楽に寄す)                | 作曲 F.Schubert           |
| ・Traum durch die Dämmerung(たそがれの夢) | 作曲 R.Strauss            |
| ・たわむれに                             | 作曲 越谷 達之助 作詞 石川 啄木      |
| ・東海の小島の磯の～                         | 作曲 名倉 晰 作詞 石川 啄木        |

□ 小林 寿和子 Suwako KOBAYASHI ソプラノ 黒田 圭子 Keiko KURODA ピアノ

・ Ariettes oubliées (忘れられたアリエッタ) 作曲 C. Debussy 作詞 P. Verlaine

1. C'est l'extase langoureuse 物憂き恍惚
2. Il pleure dans mon coeur 私の心に涙が降る
3. L'ombre des arbres 木々の陰
4. Chevaux de bois 木馬
5. Green グリーン
6. Spleen スプリーン

□ 高橋 昌子 Masako TAKAHASHI ソプラノ 松下 智子 Tomoko MATSUSHITA ピアノ

- ・ 小さな空 作詞・作曲 武満 徹
- ・ 愛 作曲 猪本 隆 作詞 鶴岡 千代子
- ・ Early in the Morning (ある朝早く) 作曲 Ned Rorem 作詞 Robert Hillyer
- ・ I will always love you (いつまでもお前を愛す) 作曲 Ned Rorem 作詞 F. O'Hara
- ・ Alleluia (アレルヤ) 作曲 Ned Rorem

□ 増田 勇人 Hayato Masuda カウンターテノール 林 翔子 Shoko HAYASHI ピアノ

- ・ A Chloris (クロリスに) 作曲 R. Hahn
- ・ Liebesbriefchen (愛の手紙) 作曲 E. W. Korngold
- ・ オペラ《ロデリンダ》よりアリア“愛しい人よ、貴女はどこに” 作曲 G. F. Handel
- ・ オペラ《オルフェオとエウリディーチェ》よりアリア“エウリディーチェを失って”  
作曲 C. W. Gluck
- ・ オペラ《ジュリエッタとロメオ》よりアリア“もし貴女が眠っているのなら”  
作曲 N. Vaccai

□ 藤田 明 Akira FUJITA 指揮

女声アンサンブル“グリュツィーネ” 山田 裕子 Yuko YAMADA ピアノ

- ・ Ave verum corpus (アヴェ ヴェルム コルプス) K. 618 作曲 W. A. Mozart
  - ・ Die Ehre Gottes aus der Natur (自然における神の栄光) op. 48-4 作曲 L. v. Beethoven
  - ・ Messe für dreistimmigen Frauenchor op. 126 作曲 J. Rheinberger
- 3声による女声コーラスの為のミサ曲：Kyrie, Gloria, Credo, Sanctus & Benedictus, Agnus Dei

< レクチャー・演奏 >

□ 講師：山田 実 Minoru YAMADA テノール 入川 めぐみ Megumi IRIKAWA ピアノ

・ 講演内容

- 1) 邦訳歌唱の功罪
- 2) 日本語歌唱の問題点
- 3) Tenors are not to be born, but to be made.

2. 日本声楽発声学会 2017年11月開催106回例会概要

◎ 2017年11月26日(日)106回例会 9:55~16:20

会場：東京藝術大学 5-109・第2ホール

A 研究発表 (会場 5-109 大講義室) 10:00~12:00

① 10:00~10:30

重田敦子(重田敦子発声研究所代表・本学会理事)

「マリアの呼吸法 Atem-Tonus-Ton における歌唱者の体験的实践からみた一考察」

② 10:35~11:05 (共同研究発表)

田村邦光(工学博士、音楽に寄す会主宰、久喜市歌声教室講師、本学会員)

河合孝夫(河合孝夫音楽研究所所長・本学会理事)

「声楽発声の母音フォルマントと会話フォルマントの比較」

③ 11:10~11:40

山田実(桜美林大学名誉教授・学芸博士・声楽家・本学会相談役)

「Pronunciation vs. Diction: 歌手の発語法~発音と発語の相違」

質疑応答 11:40~12:00

B 特別講演 13:00~15:00 (会場 第2ホール)

講師：中村敬一氏(なかむらけいいち)(演出家)

講演テーマ：「歌うことと演じること どこで、その接点を見つけるか？」

舞台上で求められる演技と発声に必要なフォームとバランスをどうとるか？」

演奏者

竹内伶奈(Sop.)、眞玉郁碧(Sop.)、児玉興隆(Bar.)、大町彩乃(pf.)

演奏曲：

W.A.モーツァルト『フィガロの結婚』より 手紙の二重唱

W.A.モーツァルト『ドン・ジョヴァンニ』より「あそこで手を取り合って」

G.ドニゼッティ『ドン・パスクワレ』よりノリーナとマラテスタの二重唱 他

C 現役声楽家の演奏とお話 15:20~16:20 (会場 第2ホール)

講師：今尾 滋氏(いまおしげる テノール)

講演テーマ：「キャリア開始後の声種変更に対する演奏家の立場からの一提言」

演奏曲目：1. R. Wagner 《ヴェーゼンドンクの5つの歌》

2. R. Wagner 《ヴァルキューレ》より

「父はわたくしに一振りの剣を約束した」、「冬の嵐は過ぎ去り」

ピアノ：古藤田みゆき(ことうだみゆき)

◎ 2018年5月27日(日)107回例会、および8月に開催の夏季研修会については、学会ホームページをご参照ください。

### 3. 会員による新刊書の紹介

竹田数章 理事

このたび、会員の竹田数章、西浦美佐子、小林武夫相談役らが中心となって『ヴォイス・ケア・ブック』を音楽之友社から上梓しました。「声を使うすべての人のために」という副題で、ガーフィールド・デイヴィス、アンソニー・ヤーンの著作を翻訳したものです。ブリン・ターフェル、キリ・テ・カナワ、アンソニー・ホプキンス……錚々たる名歌手・名俳優らが推薦！ 声を職業的に使う人のケアに役立つアドバイス・解説書の決定版。英ロイヤル・オペラほか劇場・音楽団体のヴォイス・ドクターを務めるユニヴァーシティ・カレッジ病院耳鼻咽喉科名誉最上級専門医G・デイビスと、米メトロポリタン歌劇場の専属ヴォイス・ドクターを務めるコロンビア大学医学部大学院耳鼻咽喉科学教授A・ヤーンの共著。実際に名歌手らを診察し親身になって相談にのってきた彼らだからこそ可能な、心理面や生活面など多岐にわたるアドバイスの数々、そして医学・音楽、双方の信用度の高い解説により、学生からプロの歌手・演劇人・アナウンサー・教員まで、声を使う様々な人の悩みや疑問、ニーズ等に答える。巻末「用語解説」付き。3,456 円（本体3,200 円）・【判型・頁数】 A5・228 頁【発行年月】 2017年10月上旬に発売予定です。

### 4. 音楽学の窓から 第2回

永原恵三 理事

今回紹介するのは、中国で「山歌」と言われる民謡について、中国の貴州省に住む「プイ族」と呼ばれる人々の「歌掛け」という行為を調査研究した書籍、『山歌（さんか）の民族誌 歌で詞藻（ことば）を交わす』です。著者の梶丸岳氏は1980年生まれの若手研究者ですが、東洋音楽学会の田邊尚雄賞が授与されるなど、その研究の深さは高く評価されています。日本にもかつて「歌垣」というかたちで、男女が歌を掛け合う習慣がありましたが、この歌掛けと同様に、プイ族の山歌は歌を掛け合うことで、相互行為としての歌の中に、声のあり方や言語、旋律形式など様々な「修辞学」が組み込まれていることがわかります。

いわば「声の力」はそのそれぞれの土地に根づいたあり方で表現されているのですが、そうした多様性と共に、私たちがどのような歌や声であっても、学ぼう、あるいは知りうる人間の共通の営みを、民族音楽学や人類学の研究から考えることができると思います。

【書誌】 梶丸 岳 2013『山歌の民族誌 <sup>さんか</sup> 歌で詞藻 <sup>ことば</sup>を交わす』京都大学学術出版会

### 5. 事務局だより

今年の夏は真夏日も多くありましたが、8月に至っては予想外の雨の日が多かったようです。それでも夏季研修会の折には、何とか晴れて暑い日となりました。どのプ

プログラムにも、私共が心配していた以上に多くの参加者があり、正直ホッといたしました。

初日のイタリアのテノール歌手、ニコラ・ロッシ・ジョルダーノ氏による公開レッスン。そして作曲家の香月 修氏による「日本語の歌」～歌曲・オペラの創作を語る と題しての講演。2日目の午前中は、工藤和俊氏の「身体運動科学」の講演。そして、発声学会恒例の「歌の集い」演奏会と多彩なプログラムで、たいへん好評、盛況の内に終えることができました。

たいへん好評であったなどと書くと、手前味噌だとお叱りを受けることにもなるのではと思いましたが、暑い中、全国からお集まりいただいた皆様には、大旨、来て良かったと云うお言葉を頂戴いたしました。勿論、個々にはご批判をお持ちの方もおられたこととは思いますが・・・。

これからも、多くのジャンルからの研究者に講演をしていただき、我々の学びの場を更に充実させていけたらと考えております。

前号にも書きましたが、当学会にとっての諸々の負の問題につきましても、未だ決着が着いておりません。いずれ、必ずや会員の皆様には正式な場をお借りしてご報告せねばなりません。現在はまだ進行中と言うことで、ご理解いただきたいと思えます。発声学会の将来の為に、より良い結果がもたらされますよう努力して参りたいと思っております。

事務局長 川上勝功

日本声楽発声学会事務局（担当：安原道子）

〒215-0003 神奈川県川崎市麻生区高石4-11-14-409（安原）

E-Mail : [info@jars-voice.org](mailto:info@jars-voice.org)

Tel/Fax : 044-577-2037

日本声楽発声学会Webサイト <http://www.jars-voice.org/>

郵便振替口座 00170-0-119920 加入者名：日本声楽発声学会

## 6. 編集後記

学会通信第 38 号をお届けいたします。8 月の夏季研修会の熱気の溢れる報告、会員の書籍など、学会の「今」を感じていただければ幸いです。

広報・情報委員長 永原恵三

日本声楽発声学会

学会通信 第 38 号

2017 年（平成 29 年）10 月 10 日発行

発行者：日本声楽発声学会

編集者：永原恵三

印刷所：よしみ工産株式会社東京事務所

〒113-0033 東京都文京区本郷 3-26-1 本郷宮田ビル 3F